

茶道，振り返れば50年，その1

キラメキテラス ヘルスケアホスピタル 栗 博志

[はじめに]

「和敬清寂」は，血を血で洗う戦乱の時代を生きた，千利休居士（1522-91）の究極の思想である。

和を基とする人の和・平和の希求，全ての人に敬いの心で接する平等の精神，争いは固より，矯飾や華美を排した精神の浄化と，自然と寄り添って生きるという境地は，「にじり口」を備えた草庵の茶として，利休居士が大成，具現化した「侘び茶」に集約される。にじり口は正に「力を尽くして狭き門より入れ」と言う事になる。

更にその根底を支えるものは「茶禅一味」に表される，堅固たる禅の精神である。

この思想のもとでは，専制君主や独裁者の存在する余地は無い。

一滴の血も流さず，侘び茶という「文」の力で，「武」を以って戦乱の世に名を馳せた猛将達をして，利休居士を師と仰がしめたのである。「利休七哲」は皆，戦国大名であった。

この現実を目の当たりにして，秀吉は心の奥底に畏怖の念を覚えたに違いない。「文」は「武」に勝ると。換言すれば「ペンは剣よりも強し」である。

四百年以上前に，死をもいとわず「和敬清寂」の精神を貫き通した利休居士は，日本の歴史上，最も早い時期に「平和と平等」を提唱した偉大な人物と言えよう。



図1 今日庵かふとん門前にて（平成15年3月23日）

その胸の覚悟（胆力）は、死を前にし、達観し気迫の籠った遺偈と歌に、端的に示されている。（宗博）

利休めは とかく果報の者ぞかし 菅丞相
にナルト思へば 菅丞相は菅原道真

人生七十 力囲希咄 吾這宝剣 祖仏共殺
提ル我得具足の一太刀
今此の時ぞ天に抛つ 利休

鵬雲斎玄室大宗匠（大正12年、1923年生）は、本年99歳を迎えられた。最大の慶事である。昭和24年、得度した大徳寺で修業され、翌年宗興若宗匠となられた。昭和39年に、第15代千宗室今日庵主となり、平成14年に、第16代坐忘斎家元に代を譲られ、大宗匠になられた。

一方、鹿児島大学医学部茶道部は、昭和38年に中村社中、中村宗照先生の御指導のもとに、医学部学生の松窪先輩を主將に創部され、本年で60年を迎えた。先生亡き後、茶道部の指導は、先生の娘の小牧宗代先生と浜畑宗雅先生に引き継がれた。

私も茶道部に入部し、中村宗照先生の下で茶を嗜むようになって、50余年が経過した。（以下、敬称略）

[1] 鵬雲斎玄室大宗匠

大宗匠は99歳を迎えられた現在でも、矍鑠として、国内外での献茶式、教授をしている大学の講義、講演、執筆活動などに多忙な日常を過されている。

大宗匠は海軍に入隊、飛行訓練を受け、昭和19年に海軍少尉に任官、20年に特攻訓練を受け、志願して特別攻撃隊員となるも終戦。

敗戦の傷心の中、裏千家の茶室での父淡々斎の進駐軍兵士に対する、日本人として威厳のある堂々たる態度を見て、伝統ある日本文



図2 99歳の大宗匠、ハワイでの献茶式
（淡交誌、令和4年10月号より引用）



図3 右：海軍航空隊、特攻隊員
（右から西村晃、千政興）
左：日本馬術連盟会長（平成18年）
（淡交社、鵬雲斎汎叟宗室、平成21年より引用）



図4 上：得度式を終えて、淡々斎夫妻、瑞巖老師と
下：裏千家咄々斎にて
（淡交社、茶の湯と禅、平成17年より引用）

化こそが欧米に対抗できる事を直観し、また戦争の悲惨さ、戦友の死なども相俟って、茶道を通じて平和を希求する心が芽生へ、「一盃からピースフルネスを」をスローガンに、現在に至るまで、国内外での茶道の普及、国際親善、世界平和のため尽力されている事は、衆知の通りである(図2, 3, 4)。

[2] 中村宗照先生

中村先生(明治42年, 1906年生)は、東京の実践女子専門学校を卒業後、女学校の教職を経て、昭和9年の結婚を期に鹿児島に定住。淡々斎家元より「宗照」の茶名を受ける。

先生は社中で弟子を育てる中、学校茶道に注目し、全国に先駆けて地元の国立鹿児島大学に裏千家流茶道部の設立を切望。その白羽の矢に当たったのが、医学生松窪先輩であった。そして昭和38年2月に医学部茶道部が発足した。

その後、39年に医学部附属看護学校、41年に石笑会(後に鹿児島大学学生会裏千家茶道部)の創設に伴い、その指導者となり、自分の茶室で学生を指導した。その他、三越デパー



図5 中村宗照先生の米寿を祝う茶会
出席した茶道部のOB, OGの一部
(平成8年4月28日)

トでも指導した。看護学校は渡先生に、先生亡き後は、石笑会は肝付先生に、医学部は娘の小牧宗代先生と浜畑宗雅先生に引き継がれた(図5)。

[3] その後の経過あれこれ

昭和38年2月、一学年が僅か40人の時代に9人もの部員で発足した茶道部は、中村先生の茶室で、食事と深夜までの指導で、信じ難い事に、わずか3ヶ月後の5月18日に、渡部先輩が部長(バラを育てるバラ部)の広いバラ園で野立の茶会を開くまでになった(実際は雨天のため講堂での茶会となった)。

この茶会は大盛況で、350人ものお客さんがつめかけ、NHKテレビや南日本新聞などで報じられた。

この茶会の為に、当時の宗興若宗匠より、「瓢画 雪月花」の色紙を賜り、掛けられた

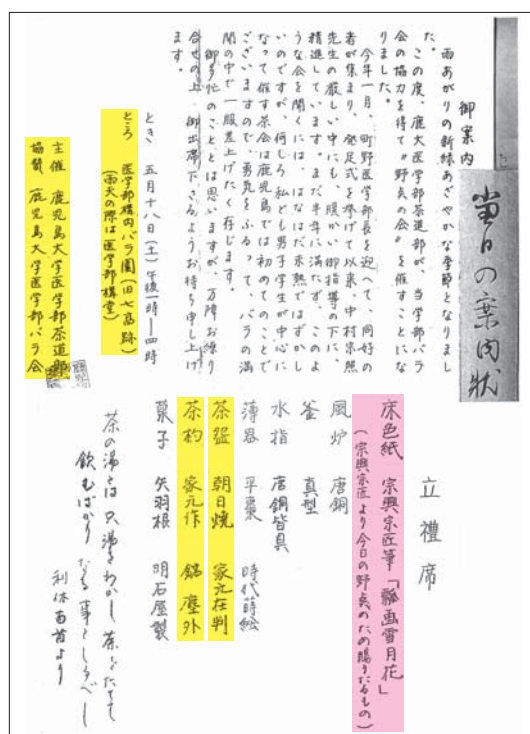


図6 第1回茶会の案内状と会記
床の色紙は宗興若宗匠より拝領
昭和37年5月18日、創部3ヶ月後

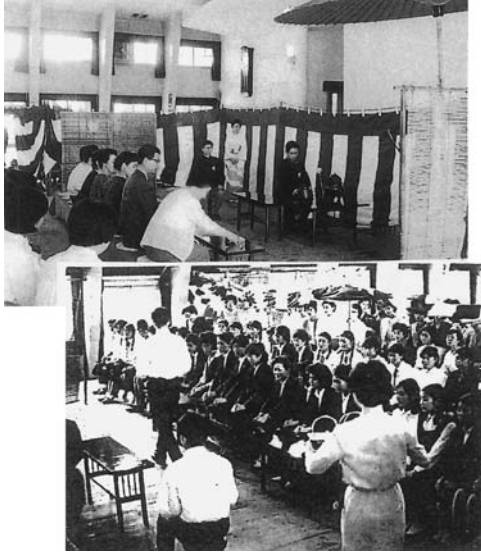


図7 創部3ヶ月後の第1回茶会
上：立派に設えられた点前座
下：純心短大のお客様



図9 第2回端午の茶会（上：昭和39年5月）と
第1回石笑会大学祭茶会（下：昭和47年）



図8 第1回茶会（創部3ヶ月後）
堂々たる点前と中村社中によるてんやわんやの水屋



図10 淡交会鹿児島支部研究会での花月
創部の翌年，昭和39年12月。
先輩ガンバレ！見事と言いたい。

（図6，7，8）。

39年5月には，第2回端午の茶会が開かれ，以後毎年，行なわれるようになった（41年から石笑会も茶会を開いた）（図9）。

39年12月には，裏千家淡交会の支部研究会で，花月を披露した。中村先生と部員の努力，意気込みがみてとれる（図10）。

41年の端午の茶会では，「鵬雲斎千宗室第

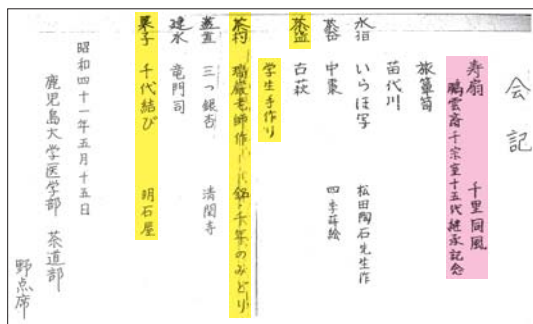


図11 鵬雲斎千宗室第15代継承記念の
昭和41年の端午の茶会

十五代継承記念の『寿扇 千里同風』を掛けて行なわれた(図11)。

ここで医学部茶道部創部初期の部員名を示す(敬称略, あいうえお順, 卒業年度順)

- ・39卒: 新城(瀬戸坂) 一子
- ・40卒: 有馬義孝, 大山勲, 上片平卓, 鶴(皆川) 紀子, 松窪尉雄, 渡部研之
- ・41卒: 永田(荒尾) 八子
- ・42卒: 宗稔, 屋良勲
- ・43卒: 福永秀智
- ・44卒: 小代正隆, 片山亀雄, 桑波田昇, 吉森道雄, 川島(園田) 智子, 牧(伊地知) 俊子

これらの部員の努力で部の基礎ができ, 以後, 順調に発展している。

図12は, 部員が茶に親しんだ中村先生の自宅と茶室。市の中央部にあり, 長い桜島溶岩の堀で囲まれた, 木々の茂った庭の中の茶室。右上に黒く茶室の屋根の一部が見える。

部活動は, 茶のみならず, 茶杓作りや, 茶碗作りも行われた。図13は, 茶碗を作る大山, 松窪ら。素朴な当時の竜門司焼(川原氏)の窯元の風景も懐かしい。

また部員の浜崎至徳先輩の追悼茶会が, 南洲寺で行なわれ, 別れを惜しんだ(41年)。

昭和42年5月の端午の茶会は, 5周年記念茶



図12 中村先生の茶室, 照月庵のある庭
茶道部員が指導を受けた, 木々に囲まれた市中の山居, 広い家で戦後, 米進駐軍に接収された。

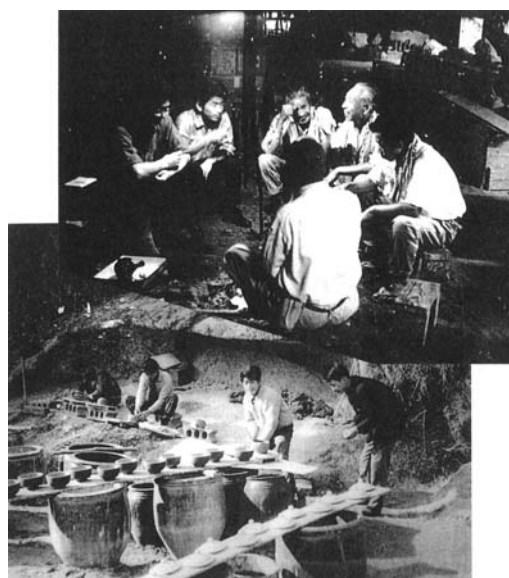


図13 薩摩焼, 龍門司焼窯元での茶碗作り

会となった。この茶会で特記すべきは, 医学部茶道部の学校茶道活動と, 中村先生の学校茶道に於る熱意ある指導に対し, 鵬雲斎家元から, 茶道具一式, 即ち, 釜, 風呂, 棚, 水指, 茶盃が贈られた事である。これらは茶会の度に使われている。ありがたい事である(図14)。

生涯で何回, 大宗匠にお会いできるか分ら

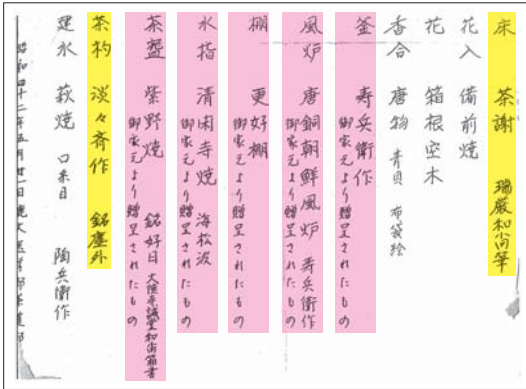


図14 昭和42年，5周年記念端午の茶会
創部5周年を記念して，鵬雲齋家元より茶道具一式を贈呈される。



図15 献茶式，講演後の楽しい懇親会

ないが，来鹿された折には，厳粛で格調高い献茶式での点前を拝見し，「一盃からピースフルネスを」を熱く語る講演を拝聴した後，懇親会に移り，和やかな態度，物腰と上品で柔らかな京言葉の大宗匠との束の間の語らいや写真撮影は，裏千家茶道を嗜む者にとっては最大の楽しみである。旅や講演でお疲れの事とは分かっていても，つい押し掛けてしまう。私共，末端会員まで平等に対応して下さる大宗匠を，皆大好きである。



図16 「一粒万倍」
平成6年6月の南日本新聞，思うこと。



図17 「一粒万倍」の御軸
創部30周年，平成6年に鵬雲齋家元より御軸を頂き，感激の中村先生と社中。

万人の上に立つ人としての，大宗匠の懐の深さ，器量は誰もが感ずる所である（図15）。

平成4年6月の30周年記念茶会には，鵬雲齋家元より「一粒万倍」の御軸が贈られた。

医学部はもとより，最も嬉しかったのは，部員は年々変われど，30年間，一貫して茶道部を暖かく指導されてきた中村宗照先生と，先生を支えてきた中村社中だったろう（図16，17）。今年茶道部は60周年を迎えた。先生と社中に感謝したい。

（つづく）